

# 余市水産博物館

BULLETIN OF  
YOICHI FISHERIES MUSEUM

## 研究報告

---

第 17 号 2023 年 3 月

村本 周三：余市水産博物館所蔵の「モヨロ貝塚産」軽石製「石皿」について……	1
浅野 敏昭：猪俣家の足跡 .....	9
令和4年度博物館活動報告 .....	17

余市水産博物館

余市水産博物館  
研究報告

第 17 号 2023 年 3 月

余市水産博物館



## 余市水産博物館所蔵「モヨロ貝塚産」の「石皿」について

村本周三

北海道札幌市中央区北3条西6丁目(北海道環境生活部文化局文化振興課縄文世界遺産推進室)

### 1 はじめに

余市水産博物館所蔵資料に、宇田川洋が集成した火皿(宇田川2001)に類似するものの、既報の出土資料にはない特徴を持つ「モヨロ貝塚産」の「石皿」を確認したので報告する。

### 2 資料の保管状態

3点の「石皿」は、「永岡コレクション モヨロ貝塚 他」とのラベルが貼付された青色のプラスチックコンテナに収納されていた(写真1)。

資料1は、表面「No22 昭和 34.9.26 開元通宝 支那で一番古い銭 出品者 荒木進」、裏面「No35 昭和 35.2.21 (北見口 モヨロ貝塚産)

石皿 出品者 永岡隆」と万年筆?で書かれた厚紙製ラベルと共にビニール袋に入れられていた(写真2a・2b)。札の表裏で別の物品を示しており、展示の際のキャプションの転用としても不自然である。なお、ラベル表面に記載がある開元通宝は、同一のプラスチックコンテナ内にはなかった。

資料2は、「永岡隆」と万年筆?で書かれたコピー用紙製ラベルと共にビニール袋に入れられていた(写真3)。資料1・3に添付されたラベルが日焼けや汚れが見られるのと異なり、資料2に添付されたラベルには日焼けや汚れは殆ど見られない。

資料3は、「石皿 モヨロ産 永岡隆」と筆記ペンで書かれた厚紙製ラベルと共にビニール袋に入れられていた(写真4)。

### 2 資料の形態

#### (1) 資料1 (図1)

凝灰岩製で長さ20.5cm、幅16.5cm、厚さ10.4cm、断面形状は台形、表面には深さ1.5cm程度、裏面には深さ1.0cm程度のくぼみが掘られている。軟質で触るだけで表面が崩れるため使用時の痕跡であるかは判然としないが、くぼみ周縁の風化が顕著な面を裏面とした。

表裏面のくぼみは、痕跡から鋭利な刃部をもつ

金属製の工具で加工されたと推定される。特に裏面には幅1.5cm程度のコの字の工具痕が見られることから鑿状の工具が用いられた可能性がある。側面の加工も同様の工具で整形されたと思われるが、丁寧に研磨されているため、明瞭な工具痕は見いだせなかった。

全面が斑に赤化をしているが、表面のくぼみ内中央付近は他と比べて顕著である。また、使用に伴うものであるかは不明であるが、表面のくぼみ周縁には黒色の煤状の付着物が見られる。

くぼみ周縁にV字の欠損が見られるが、後述する資料2の欠損同様に加工痕より新しい。

#### (2) 資料2 (図2)

凝灰岩製で長さ20.3cm、幅16.0cm、厚さ11.4cm、断面形状は台形、表面に深さ1.0cm程度の側面がほぼ垂直の隅丸方形ないし楕円形のくぼみが掘られている。資料1同様に軟質である。裏面には高さ約3.0cmの脚が作り出されており、一部欠損しているが本来は三脚であったと考えられる。

資料1同様に金属製の工具で加工されたと推定される。資料1以上に加工痕より新しい傷が目立ち、脚の欠損、くぼみ周縁にV字等の欠損が見られる。

側面は資料1同様に赤化をしているが、風化が進んでいる表面、欠損が大きい裏面は顕著ではない。

#### (3) 資料3 (図3)

軽石製で長さ15.1cm、幅10.3cm、厚さ4.0cm、全面が丁寧に研磨されており、くぼみ周縁はなだらかで、断面形は緩やかなU字形である。丁寧に研磨により工具痕は不明瞭であるが、正面中央付近にコの字の工具痕が僅かに見える。

赤化は明瞭ではないが、使用面と思われる正面は他の面と比べて暗色である。

側面には加工痕より新しい傷が見られる。



写真1 「モヨロ貝塚産」軽石製「石皿」が保管されていたコンテナ

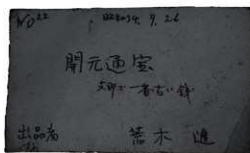


写真2a 資料1 添付のラベル (表面)

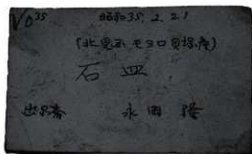


写真2b 資料1 添付のラベル (裏面)

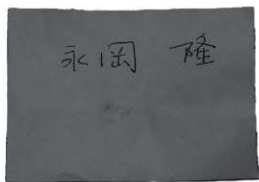


写真3 資料2 添付のラベル

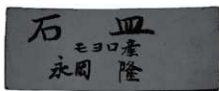


写真4 資料3 添付のラベル

品名	数量	単位	備考
石皿 (500円)	1	枚	永岡隆
開元通宝	500	枚	
モヨロ産	1	枚	
石皿	1	枚	
石皿	1	枚	
石皿	1	枚	

写真5 台帳中での「石皿」の記載

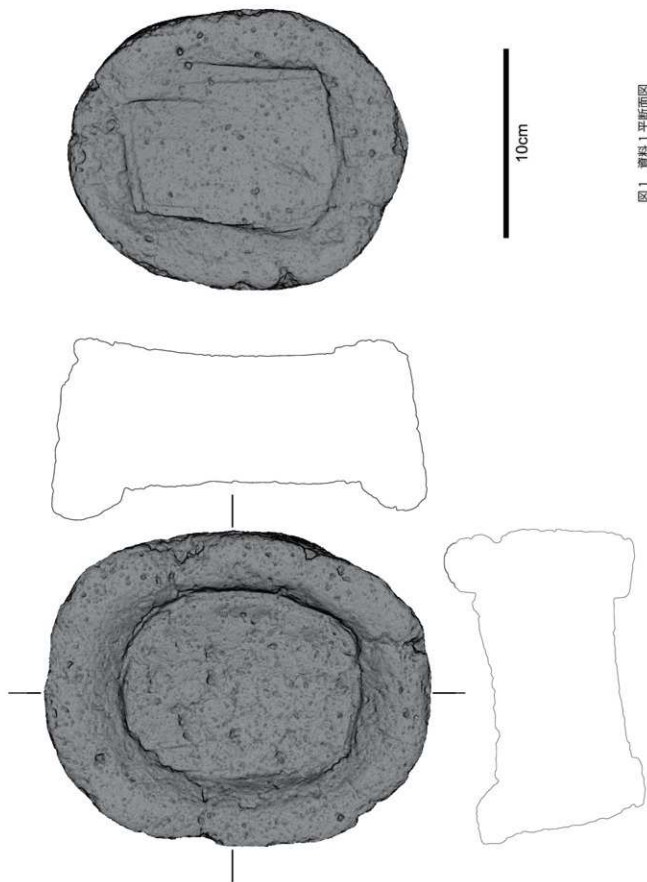


图1 資料1平断面図



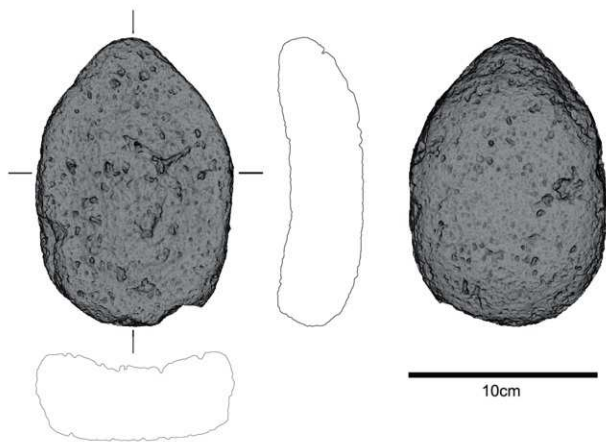


図3 資料3 平断面図



### 3 考察

#### (1) 資料の来歴

資料が収納されていたコンテナは新品同然であり、新品のコンテナに収納し、ラベルを添付した後は保管状態に変化がないものと考えられる。コンテナ添付のラベルには日焼けや汚れがあることから別のコンテナ等から移し替える際にラベルのみを転用した可能性がある。

別途保管されていた台帳から昭和 34 年 8 月 1 日～昭和 35 年 7 月 31 日に「モヨロ出土石皿」3 点等が寄贈または貸与されたことを昭和 57 年に追記した記載がある(写真 5)。日付の記載がない「石皿(モヨロ産)」と「二足の石皿」と重複する遺物であるかは台帳上明確ではない上に、資料 1 ラベルの「昭和 35.2.21」と矛盾するが、1959～1960 年の間に永岡隆氏から余市町へ寄贈または貸与されたと考えてよさそうである。なお、永岡隆氏は 1959 年 3 月から 1967 年頃まで余市町立白岩小学校の校長をつとめ、「考古学の造詣深く、在任中、余市付近の岩石の中で珍しいものを蒐集し、研究に励んでいた」とのことであるが(余市教育研究所編 1987 p.221)、著作等は知られておらず、資料の入手経路も分からなかった。

資料に同封されていたラベル及びプラスチックコンテナ添付されていたラベルは、作成時期に差があると思われる、資料 2 添付のラベルには日焼けや汚れが目立たないことから、他のラベルより新しい時期に作成されたと考えられる。また、記載内容にもばらつきもあるため、いずれのラベルも寄贈又は貸与当初から添付されていたものではなく、再整理の過程で添付されたと考えられる。いずれの資料にも加工痕より新しい V 字等の欠損が見られる。最も大きい資料 2 の脚を欠損させた傷は、断面が緩やかに湾曲しており(図 2 欠損部拡大)、島田鎌や円匙のような刃部が湾曲した道具によるものと考えられる。そのため、発掘調査によるものであるかは不明であるが、遺棄または埋納されて土中であつたものを掘り出したと考えられる。

#### (2) 資料の形態的特徴

資料 1、2 は、平面形では宇田川分類の「タイプ A(楕円形のグループ)」または「タイプ C(方形のグループ)」のいずれに該当するか判然としない。しかし、図 25 の 5 に類似し、「断面の外壁がやや

ストレートなのが特徴になるのかも知れない」(宇田川 2001 p.60.1.1)との記述があることから、タイプ C に該当すると考えられる。また、正裏面にくぼみが掘られるという資料 1 の特徴は、既報の遺物には類例がない。

資料 2 の脚は、湧別町登栄床地区表採のオホーツク文化期とされる石皿(大場 1965:p.58 写真 33)の類例がある。しかし、写真を見る限りは脚の形状も全体の形状も異なる。

資料 3 は、平面形は「タイプ D(薄型のグループ)」に類似するが、タイプ D の例に比べて厚く、断面形はタイプ A やタイプ「B(円形のグループ)」、アイヌ文化期以前の遺物とされるもの(宇田川 2001: 図 26)に類例がある碗形である。既報では中標津町上標津採取のものに類似する(佐川 1976、村田 2014)。

#### (3) 資料の時期

本報告の 3 資料は欠損から伝世品ではなく、土中から回収されたものと考えたが、共伴遺物が不明で製作時期が不明であることから、類似の遺物の出土状況等から製作時期または廃棄時期を検討した。

資料 1、2 と類似した遺物は、斜里町オンベツ川西側台地遺跡(河野 1959、斜里町教育委員会編 1993)、小清水町フレイトイ貝塚(米村編 1989)、苫小牧市弁天貝塚(苫小牧市埋蔵文化財調査センター編 1988)で出土している(図 4)。

斜里町オンベツ川西側台地遺跡では資料 1、2 に類似の資料が樽前 a 火山灰(Ta-a:1739 年降下)または駒ヶ岳 c2 火山灰(Ko-c2:1694 年降下)より上層で合わせて 7 点が出土している。

小清水町フレイトイ貝塚では、類似の資料の完形、破片合わせて 5 点出土している。図示はされていないものの、「貝殻層、貝殻が堆積され砂混じりの腐植土が含まれているが上部には乳白色の微粒状火山灰が全面に薄く堆積し、貝層中まで混入している場所も見られる。」(米村編 1989:p.10.1.13)と記載されている。Ta-a または Ko-c2 より下層で貝層が検出されたことを示すかのような記載であるが、出土した陶磁器の特徴から貝層の形成時期は 18 世紀後半から 19 世紀初頭とされており、Ta-a または Ko-c2 より上層で貝層が検出されているものと考えられる。

苫小牧市弁天貝塚では、樽前 b 火山灰(Ta-b:1667

年降下)より上層から破片1点が出土している。

以上から資料1、2は古くとも17世紀後半、おおむね18世紀半ば以降と考えると良さそうである。

資料3は、形態はオホーツク文化期以前にもあり得るように思われるが、痕跡として残るような鑿状の工具の存在がモヨロ貝塚周辺の地域で想定されるのは古くともオホーツク文化貼付文期である(田代2013、村本2018)。モヨロ貝塚であれば貼付文期の遺物である可能性も否定できないが、明確に当該期といえる類例がないことから、資料1、2に先行するとしても、オホーツク文化期にまで遡ることはないと考えるのが妥当と思われる。

#### (4) 出土状況

出土資料は多くが破片で、オンネベツ川西側台地遺跡出土の7点、フレイト貝塚出土の5点のうち3点、弁天貝塚の1点は、くぼみの中央付近への打撃により四分しており、当該石器の廃棄方法を示すものとして注目される。なお、斜里町教育委員会による発掘調査以前にオンネベツ川西側台地遺跡で発掘された資料(河野1959)は、資料1、2同様に厚みがあり、廃棄時破壊された形跡がないため、形態と廃棄方法に関係がある可能性もある。また、送り場や貝塚から出土している例が多いことも注目される。

#### 4 おわりに

今回報告した資料は、いずれも表面の傷から土中より掘り出されたものと考えられる。また、宇田川の資料集成でオホーツク管内での出土例が多いことから、モヨロ貝塚出土との記載も妥当性であると思われる。なお、宇田川の資料集成では凝灰岩製の火皿は余市町大川遺跡出土の1例だけが挙げられており、やや珍しい資料である。製作時期は不明だが、これまでの出土例から古くとも17世紀後半、おおむね18世紀以降と考えられる。

#### 謝辞

本稿を執筆するにあたり、熊木俊朗氏、種石悠氏から遺物及び関係文献についてご教授頂いた。また、以下の方々からご助言をいただいた。末筆

ながらお名前を記し、感謝申し上げます(敬称略、五十音順)。

浅野敏昭 大坂拓 鈴木琢也 高橋美鈴  
野口淳

#### 引用文献

- 宇田川洋(2001)「アイヌの軽石製火皿の文化的的位置づけ」『アイヌ考古学研究・序論』p.55-78 北海道出版企画センター(原著1979)
- 大場利夫(1965)「湧別の古代」『湧別町史』p.20-61 湧別町役場
- 河野広道(1959)「アイヌ軽石製火皿について」『博物館研究報告』1-1 p.21-25 旭川郷土博物館
- 佐川清浩(1976)「軽石製の皿」『郷土研究なかしべつ』創刊号 p.33-34 なかしべつ町郷土研究会
- 田代雄介(2013)「オホーツク文化における石鐘の製作技法に関する一復元案」『北海道考古学』49 p.123-130 北海道考古学会
- 村田一貴(2014)「資料紹介：アイヌ民族の軽石製火皿について」『中標津町生涯学習情報らいふまつ』vol.194 p.5 中標津町教育委員会生涯学習課
- 村本周三(2018)「オホーツク海南岸から太平洋岸におけるオホーツク文化貼付文期の石器粗製」『北海道考古学会』p.121-130 北海道考古学会
- 平河内毅(2016)「知床岬遺跡のコンプラ瓶」『知床博物館研究報告』38 p.41-47 斜里町立知床博物館
- 斜里町教育委員会編(1993)『オンネベツ川西側台地遺跡』斜里町教育委員会
- 米村哲英編(1989)『フレイト貝塚』小清水町役場
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター編(1988)『弁天貝塚II』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 余市町教育委員会編(1999)『入舟遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
- 余市教育研究所編(1987)『余市文教発達史 戦後編』余市郷土史4 余市教育研究所



海岸線は国土数値情報（海岸線データ：北海道）を使用

図4 北海道内における火皿の分布（宇田川2001、平河内2016より作図）

## 猪俣家の足跡

浅野 敏昭

北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

### 1. はじめに

銀鱈荘、旧猪俣家住宅を指して郷土研究家の小寺平吉は、「戦時中、北千島漁場へ移築されたりして、めばしい豪華なものはほとんど姿を消してしまった。そのように希少価値をもっている鯨御殿がもう一棟、この小樽市にある。場所は小樽市の南端、平磯岬の丘陵の上に移築されたものがそれである。」と述べている<sup>1)</sup>。

明治33（1900）年、猪俣安之丞の邸宅として建設された、平家建、一部二階付き、延べ450㎡の旧猪俣家住宅は、昭和13（1938）年に小樽市に移築され、昭和40年代に北海道全域を対象として行われた民家調査において、「A級」と評されている<sup>2)</sup>。

本稿では余市町の一資本家として、漁業、廻漕業、製造業、金融業など多種多様な経営活動を繰り広げた猪俣安之丞、嗣子安造の二代にわたる経営活動を整理する。

### 2. 猪俣家の来歴

猪俣安之丞は、天保11（1840）年5月、新潟県刈羽郡宮川町（現在の柏崎市）に生まれ、安政2（1855）年、北海道渡島半島の西海岸の江差に渡道、慶応2（1866）年に余市町山碓（現在の余市町港町付近）に居をかまえ、「漁業、海産商、荒物商、廻船問屋」を営んだ。明治14年、余市小樽間の電線架設に尽力し、同27年設立の余市銀行の発起人となる<sup>3)</sup>。安造は明治18年、宮川村の猪俣家に生まれ、余市町ですでに大資産家と呼ばれていた祖父、猪俣安之丞の家督を相続した<sup>4)</sup>。

猪俣安之丞は明治16年当時、余市郡山碓町の町村総代人としてその名がみえ、その後、別の者に改選、同18年9月に改選で再び安之丞が復帰している<sup>5)</sup>。

安之丞の妻、キンは安之丞とは同い年で上ノ国村出身、幕末には結婚していたと伝わる。

明治40年代には、「猪俣安之丞氏の名声を耳にせざるなく、山碓町（現在の港町付近）広社の建物其一町四方にめぐれる石蔵の大建築を見て…徳川幕府時代郷国越後を辞して余市に漁業を經し…余市開墾株式会社余市銀行等々安之丞氏の創意になる…」と余市の実業家として頭角をあらわした安之丞が紹介されている<sup>6)</sup>。

猪俣家は、春鯨漁の活況に沸いていた幕末のヨイチ場所に居を構えた。同地は幕末から明治にかけて追鯨漁民による急速な漁村集落の発達が見られ、同場所の各漁場、すなわち余市川河口、ハルトロ領分から西方のイウナキまでの各漁場別における追鯨漁民は、安政3年時、家数67軒259名から、明治3年時、家数128軒、423名と急激な増加を見せた<sup>7)</sup>。

その出身母村12村中、江差（22名）と塩吹村（汐吹村、15名）が突出し、塩吹村を加えた上ノ国、炭焼沢村からの来住者が多い傾向は引き続き見られた。



图1 余市郡富澤市街地图(部分)

明治10年代と推定される「余市郡富澤市街地図」に見える猪俣家は、市街地のほぼ中央に位置している(図1)。同図下方の海岸線沿いに、郷社地側(図右方)から相内市松、相内市蔵、林長左衛門、小嶋文四郎と続き、旧場所請負人や幕末から移住した追鯨漁民の系譜の者が並ぶ。

「山碓町裡道」に面して名前の連なる者は海岸線に接し、漁船の接岸や漁獲物の陸揚げ、海産干場や魚肥製造上の煮沸工程を行い得る作業至便な場所を占有しており、近世からの追鯨漁民らの先発集団といえるかもしれない。猪俣家は海岸線から離れた「中町裡道」に面して居を構えており、漁業経営を主目的とするには後発組だったものと思われる。

本図で注目すべきは、四角に漢数字の「三」、「カクサン小路」なる加筆である。明治33年に猪俣家が建設されて以降、同家敷地から南方へ伸びる小路を地域住民が名づけたもので、「カクサン」は猪俣安之丞家の店印(タナジルシ、シルシ)である。

安之丞は先述したとおり、余市郡山碓末町に來住、その後、中町へ転居後(本図1)、山碓へ再び転居したのであろうか。もう一点、本図上方に見える「貳千參百貳坪 猪俣安之丞宅地 宅地」の記載である。

安之丞の邸宅は建つことはなく、檀家であった西本願寺派乘念寺が明治10年代に創建されることとなる。

### 3. 猪俣家の漁業経営

図2は、『後志國盛業図録』(明治22年発行)所収の「後志國余市郡山碓町十二番地 カクサン商店 猪俣安之丞」の頁である<sup>8)</sup>。版画2枚を連ねた漁家建築と蔵々、漁船と加工設備などが描かれ、同家の大規模な漁業活動の一端が垣間見える版画と捉えたいが、本図の主題はカクサン「商店」である。

本図は、漁夫収容を兼ねた定置網経営者の住居である番屋建築と<sup>9)</sup>、土蔵、船倉、網倉、魚肥や身欠製造の加工施設、製品の貯蔵庫などをあわせた、いわゆる「漁場」の様相が描かれ、左頁上方には、「同町十六番地漁場」と記されているので、商店と漁場をあわせた建築群と理解したい。

本図の細部を若干観察すると、石浜の海岸線に漁船が係留され、ほぼ等間隔でロウカ(労家、廊下)と呼ばれた船倉3棟が並ぶ。画面左端は茅葺き、中央と右端は長桁葺きの石置屋根と思われる。白壁が見える2階建ての瓦葺土蔵があり、2階窓上方にはカクサンのシルシが見える。土蔵に連続して、石置屋根、煙出しと天水桶を備えた、平入り、2階建ての住宅(番家建築か)が見え、裏側は塀囲いの作庭をうかがわせる。

図3は前掲『後志國盛業図録』所収の「後志國余市郡濱中村二十一番地 カクマタ カクサン猪俣安之丞 出張漁場」の頁である。濱中村は山碓町の東側に位置する。本図画面左下から右上にかけて魚肥製造の工程(煮沸、圧搾、乾燥、手返し)が描かれ、定置網漁用の漁船(水押が突出する三半船)も見える。

図4も同家の出張漁場、「後志國余市郡沖村六十番地 カクジョウ カクサン猪俣安之丞 出張漁場」の頁である。造成された狭隘な平地には漁船が係留され、モッコ(運搬具)を背負った者が見える。漁獲物は画面中央に見える魚肥製造設備で魚肥として加工され、段丘上の平地で乾燥された。

次に明治後半から大正期、昭和初期にかけて猪俣家が関わった鯨定置網を見ると、同家が定置網漁を開始したのは明治13年以降のことで、廻船業で得た資金によって明治10年代に鯨定置網漁業権を購入したと伝わっており、明治30年代に同家が所有し直営漁した定置網と他者へ賃貸した網をあわせると11

カ統、大正期もほぼ変わらず 12 カ統に関わった<sup>10)</sup>。このうち同家が漁夫や陸上での加工を担う者を雇用し、漁船や漁網、加工設備諸々を用意して行う直営漁、直営加工は余東定第 53 号、同 71 号のわずか 2 カ統のみで、他は他者への賃貸を行っている (図 5)。



図 2 後志國余市郡山碓町十二番地カクサン商店  
猪俣安之丞『後志國盛業図録』



図 3 後志國余市郡濱中村二十一番地カクマタカ  
クサン猪俣安之丞 出張漁場『後志國盛業図録』

余東定第 53 号は余市町山碓町字ベンケイナツボ、同 71 号は山碓町字前浜に位置する定置網で、両網とも他者との共同経営による。最多で 104 カ統を数えた余市地方の鯺定置網漁業権のうち 1 割程度の定置網漁業権への関わり方は、地域でトップクラスの漁業経営規模とはいえ、その大半を他者への賃借にあてた経営形態ということになる。

この頃に同家が所有していた住居や蔵などの建築群は、余市郡山碓町 (現余市町港町) に本宅以外に住宅 2、板庫 8、町内濱中町に板庫 12 であって、町内沖村 (同豊浜町) には板庫 5、町内谷部 (同榮町) には板庫 5 の計 32 棟の建物を持つに至った。

廻船業は八幡丸 2 隻と神風丸を持ち、廻船業により得た資金は鯺定置網漁業権だけではなく、カムチャッカでのサケマス漁にも投入された。



図 4 後志國余市郡沖村六十番地 カクジョウ  
カクサン猪俣安之丞 出張漁場

写真 1 は明治 44 年発行の『東宮行啓記念小樽區写真帖』に掲載された猪俣家住宅である。写真には、

「本圖は余市町漁業家猪俣氏の居宅を撮影せるものなり同家は先代以来同地有数の大漁業家にして陽春四月漁の盛時は區製三十號の如き景況を庭前を見るを得」とある。行啓に際して発行される行啓先（予定地）の農林水産物、景勝地、産業実景などが写真帖の体裁にまとめられた。小樽區の代表的な住宅建築として猪俣家が評価されたものといえよう。

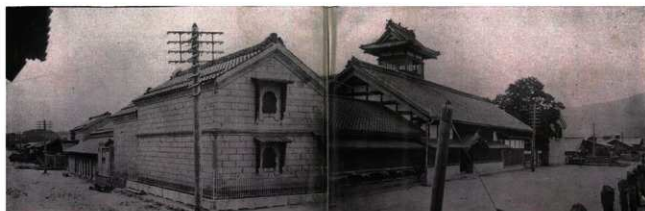


写真1 猪俣家住宅

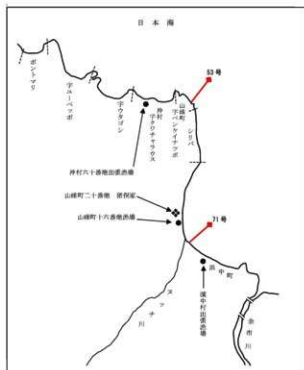


図5 猪俣家所有の鰾置網（53号、71号）

#### 4. 商家としての猪俣家

##### <余市銀行>

猪俣家は、明治27年には余市銀行設立の発起人となり、同時に赤井川原野650万坪の開拓に着手する。余市銀行設立前の同26年、普通銀行設立に関する銀行条例が施行され、全国各地に普通銀行設立の機運が盛り上がり、余市での銀行設立に乗り出したのは安之丞のほか、林長左衛門、福原才七、中村源兵衛、



渡辺良造といった地元漁家であった。翌 27 年 3 月 15 日に余市郡浜中町 64 番地(旧番地)において余市銀行の営業が開始され、頭取は猪俣、取締役は林、渡辺、監査役は福原、中村が担う。

翌 28 年には小樽と岩内に支店が設けられ、同 30 年には小樽に本店が移されて小樽銀行と改称、資本金も 10 万円から 50 万円へ増資、18 名だった株主も 281 名に急増する。同 39 年には北海道商業銀行と合併し北海道銀行と改称(現在の北海道銀行とは別の銀行)、同行は道内で筆頭の普通銀行となるに至った。同行は漁業資金の供給が主な業務内容であったが、赤井川の山林原野約 650 万坪の開墾も目的としており、開墾は同行設立後すぐに開始、まず 27 年に 200 万坪、翌 28 年には 143 万坪の官有林が貸下げられて入植者が開墾にあたった。

#### <余市開墾株式会社>

赤井川原野の開墾を直接的に担ったのは、同 30 年、銀行の所在地に設立した余市開墾株式会社で、同社は未開地の開墾を主な目的としたが、同時に漁業用木材の入手も視野に入れていた。赤井川原野は「赤井川沿岸及ヒ其川口附近ナル余市川沿岸」の広大な土地で、大木が生い茂り昼でも暗く、8 尺(約 2.4 m)を超える笹竹も密生していたと伝わる。開墾予定地の総面積(同 27 年、28 年の許可地)はおおよそ 250 万坪と広大であったが、2 年間の開墾を経て約 17%の土地を開墾した。

#### <余市川河身改修埋立工事組合>

余市駅から余市川右岸までは、車馬の通行には不向きな湿地地帯であったが、商業地などに有望と考えた地元の資産家、但馬八十次は安之丞の息子、猪俣安造と共同で余市川河川改修のための余市川河身改修埋立工事組合を設立した。工事は大正 9 (1920) 年に開始、関東大震災の影響で 1 年の休止期間を経たが、同 14 年に終了した。工事途中、余市興業社へと組織変更し、同社の事業内容には、住宅建設や簡易水道敷設もうたい、商業地や宅地開発を目指した。工事対象面積は 3 万 7 千坪、費用は当初 40 万円(当時)の予定であったが、結局 60 万円を超えることとなり、その後の土地販売も軌道に乗らず、会社は解散を余儀なくされる。

#### <余市電鉄株式会社>

昭和 7 年に設立され、翌 8 年 5 月 10 日に水産試験場から余市駅までをガソリンカーで結んだのは余市臨港軌道株式会社であった。これも昭和 5 年に安造が設立申請した余市電鉄株式会社であったが、前述した余市興業社による埋立事業後の事業が軌道に乗らなかったことが影響したのか、運行開始には到らず、一切の権利を受け継いだ余市臨港軌道がこの路線を再整備し、余市駅のある黒川町と浜中町間の路線を国鉄(現在の J R)と連絡させ、路線は縮小しながら昭和 10 年代まで営業を続けた。

### 5. 余市町にのこる猪俣家の足跡

#### <余市郡漁業協同組合長就任と水産会館の建設>

猪俣安造は大正 14 年、余市郡漁業協同組合の第 4 代組合長に就任し、余市港の改修、水産試験場の誘致、漁業組合事務所の新築という 3 つの大きな事業にとりかかった。

当初予算 1 万 7 千円(当時)で着工された工事は、天候不順による遅れと「建築技術が低かったこと」から 6 千円増額の 2 万 3 千円(当時)で完成する<sup>11)</sup>。工事は札幌市の白沢建設工務所が請負い、同 15 年 5 月

に着工、およそ8か月で完成し、余市水産会館と命名され、鉄筋コンクリート造2階建(一部地下1階)の内部は、1階に応接間、役員室、事務室が、2階には200人収容の会議室があった。屋上には天気予報を知らせる信号柱を備え、投光器は夜間の船舶の航行を見守っていた。

猪俣組合長は工事費が増額したことに責任を感じて自費による補てんを申し出たが、組合役員はこれを個人の負担には出来ないとし、組合所有の山林を売却して不足分に充てたという逸話ものこっている。

#### <北海道水産試験場本場の誘致>

昭和4年10月13日、浜中町に完成した北海道水産試験場本場(現在の中央水産試験場)の誘致にも安造が大きく関わる。移転誘致の経緯を伝える新聞記事には、「町の税金の半分以上を納めていた」ニシン漁業者の先頭に立ったのが猪俣安造と林孫蔵で、当時の笠島町長とともに関係方面に積極的に働きかけて約6万円(当時)の資金を集め、林氏所有の土地を提供するなど誘致に好条件を揃えた。

鉄筋コンクリート3階建ての本館の設計は、札幌グランドホテルを手がけた会田久三郎氏によるもので、工事は道庁の直営で進められた。

## 6. まとめ


猪俣安之丞、安造は2代にわたり金融機関設立、農場経営、醤油醸造など多岐にわたる事業をてがけ、漁協組合長、金融機関の役員など多くの役職に就任し、名望家としての地位を手に入れることとなった。

昭和に入って、余市興業社による余市川埋立事業での宅地開発が不調、余市電鉄も営業開始に到らず、なによりも打撃だったのは昭和初期の鯨漁の不振だったと思われる。昭和5年や同9年の余市地方は未曾有の大凶漁となり、以降も漁獲は完全には復活せず、猪俣家だけでなく余市町全体が停滞に入った時期でもあった。こうした中、同13年、猪俣家本宅は北海ホテル(当時)が取得して小樽市へ移築されることとなる。

明治10年代から昭和に入るまでの間、北海道西海岸の多くの鯨漁家は道路敷設や電線架設、学校建設、金融機関設立など地元のインフラ整備に貢献した。その中でも余市地方におけるインフラ整備において、猪俣家は特筆すべき貢献度の高さを誇り、同時に地元の社寺への寄進にも熱心であった。

菩提寺への敷地寄附、社寺への寄進物など、余市町内はもとより、安之丞の妻、キンの出身地である上ノ国町、安之丞の出身地である柏崎などへ多くの寄進を行った。自らの才覚によって、地域の社会資本整備を大胆に進めようとした篤志家、猪俣家の功績は後世に伝えるべきものである。

本稿は株式会社ニトリ(発行所、発行者は似島昭雄氏)により、2022(令和4年)5月発行の『銀鱈荘 建造物調査報告書』に掲載された「猪俣家の足跡」を再掲載するものである。なお、掲載にあたっては発行者の承諾を受けていることを申し添える。

- 
- 1) 『北海道の民家』昭和44(1969)年11月30日 小寺平吉 明玄書房 P.117
- 2) 『建造物緊急保存調査報告書』昭和47(1972)年3月30日 北海道教育委員会
- 3) 『余市郡郷土誌』昭和8(1933)年 余市町教育会 P.9
- 4) 『猪俣家小伝』平成20(2008)年 川端有 余市互本 P.50
- 5) 前田克己先生遺稿 余市町史草稿 第1分冊 令和元(2020)年 余市町教育委員会 P.67
- 6) 『小樽区外七郡案内』 明治42(1909)年
- 7) 「川内家漁業資本の推移について」『余市水産博物館研究報告第3号』 浅野敏昭 平成12(2000)年
- 8) 『後志國盛業図録』 明治22(1889)年 余市水産博物館所蔵
- 9) 番屋の呼称は、近世下、請負商人が場所の各所に配した番人の作業小屋の名称を語源とし、土間と板間で構成された10数坪の小屋であった。
- 10) 「余市地方における釐定置漁業権の変遷—『免許漁業原簿』の内容を中心として」 『北海道開拓記念館調査報告』第28号 山田健 平成元(1989)年
- 11) 『余市郡漁業協同組合創立百周年記念誌』

## <年 報>

### 令和4年度活動報告

#### 1. 施設概要

余市水産博物館・旧下ヨイチ運上家・旧余市福原漁場・フゴッベ洞窟

開館時間 9:00～16:30

休館日 月曜日・祝日の翌日・年末年始・冬期

開館期間 令和4年4月9日～12月11日

#### 2. 運営

##### (1) 令和4年度職員

教 育 長 前坂 伸也

教 育 部 長 中村 利美

社会教育課長兼余市水産博物館館長(学芸員) 浅野 敏昭

社会教育課主幹兼文化財係長 奥寺 淳

社会教育課文化財係

主任(学芸員) 高橋 美鈴

学 芸 員 中塚 風沙

主 事 井上 彩乃

会計年度任用職員(余市水産博物館) 葦本 伸浩・島澤 哲子・山下 明子・松井 正光

(運 上 家) 奥野 弘幸・赤岩 ふみえ・石川 騰

(福 原 漁 場) 片山 豊・小泉 幸司・門平 典之・菅谷 美樹

(フゴッベ洞窟) 三上 直樹・大森 博子・遠山 明江

##### (2) 余市町文化財関係施設管理運営委員並びに文化財専門委員

任 期: 令和4年4月1日～令和6年3月31日

委 員 長: 酒井 近義

副委員長: 杵渕 瑞枝

委 員: 明村 秀之(専)、高橋 智英(専)、澤野 宗一、伊藤 二郎、玉川 義美

※(専)は余市町文化財関係施設管理運営委員のみ

##### (3) 令和4年度の主な活動状況

4月9日 令和4年度開館開始

5月12日～13日 芝浦工業大学(岡崎准教授、西山氏ほか) 旧今邸建造物調査

6月15日～17日 北海道余市紅志高等学校インターンシップ受け入れ(高橋・中塚)

6月17日 文化財パトロール(余市町内・中塚)

6月29日 東京都立大学(斎野氏) 大川遺跡出土資料調査

6月29日～30日 旧 余市市福原漁場防災設備改修事業に係る文化庁調査官現地指導(浅野・高橋・中塚)

7月6日～8日 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(田村主任研究員) ガラス製遺物の資料調査(研究協力:高橋)

7月11日 熊本大学(木下氏) 大川遺跡及び沢町遺跡出土勾玉・玉製品資料調査

7月16日～17日 北海道埋蔵文化財センター福井氏、熊本大学小畑教授ほか、大川遺跡出土土器・大川遺跡及び入舟遺跡出土魚形石器資料調査

- 7月21～22日 ニッカウキスキー余市蒸溜所施設保存活用計画策定事業に係る文化庁調査官現地指導（浅野・高橋・中塚）
- 7月28日 第1回ニッカウキスキー余市蒸溜所施設保存活用計画 計画策定委員会（浅野・高橋・中塚）
- 7月30日～11月5日 運上家・福原漁場・フゴッペ洞窟ボランティア説明員活動（完全予約制）
- 8月5日 サイモンフレーザー大学（七座氏） 大川遺跡出土動物遺存体サンプリング調査
- 8月24日～26日 旧余市福原漁場文書庫 瓦修理
- 8月～9月30日 旧余市福原漁場納屋場 復元
- 8月26日 第1回余市町文化財施設管理運営委員会・余市町文化財専門委員会
- 8月27日～28日 上越大学（浅倉特任教授）・北海道大学（佐々木特任教授、谷本教授ほか）入舟遺跡出土漆器資料及び博物館所蔵民具資料調査
- 8月29日～31日 東京大学（萩野氏） 大谷地貝塚及びフゴッペ貝塚出土資料調査
- 9月7日 芝浦工業大学（岡崎准教授、西山氏ほか） 旧今邸建造物調査
- 9月15日～20日 東北芸術工科大学（鈴木氏） 大川遺跡出土土鐵資料調査
- 9月18日～20日 熊本大学（小畑教授、イ・ユンジ氏ほか） 余市町内出土土器資料調査
- 9月25日 東北芸術工科大学（加賀美氏） 大川・入舟遺跡出土土刀・小刀資料調査
- 11月5日 余市町会津藩土入植150周年記念事業「会津と余市をつなぐ食と未来」
- 11月9日 第2回ニッカウキスキー余市蒸溜所施設保存活用計画 計画策定委員会（浅野・中塚）
- 11月19日～20日 上越大学（浅倉特任教授）ほか 博物館所蔵民具調査
- 11月22日 札幌市立大学（金子准教授） 余市水産博物館建築図面資料調査
- 12月11日 令和4年度開館終了
- 12月12日～13日 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（田村主任研究員） ガラス製造物の資料調査（研究協力：高橋）
- 12月19日～20日 北海道大学（高瀬教授） 大川遺跡出土動物遺存体サンプリング調査
- 12月19日～21日 旧下ヨイチ運上家 燻蒸作業
- 12月16日 芝浦工業大学（西山氏ほか） 旧今邸建造物調査
- 12月31日～1月5日 博物館・運上家・福原漁場・フゴッペ洞窟 年末年始巡回
- 1月23日～25日 西谷氏 大川遺跡及び入舟遺跡出土銭貨資料調査
- 1月25日 博物館及び文化財施設消防訓練
- 2月13日 古文書解読システム「ふみのはぜみ」システム利用開始（高橋）
- 2月16日 第2回余市町文化財施設管理運営委員会・余市町文化財専門委員会
- 2月17～19日、27～28日、3月6～8日 北海道博物館（三浦学芸員）林家文書資料調査
- 2月21日～22日 北海道博物館（大坂学芸員）アイヌ民族関係資料調査

#### （4）博物館及び文化財施設利用状況

令和4年度は210日の開館、博物館2,955人、運上家3,044人、福原漁場2,925人、フゴッペ洞窟10,106人の来館者があった。

昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、博物館40人、運上家40人、福原漁場35人、フゴッペ洞窟20人の入場制限を設けた。

月別の入館者数は、別表のとおりである。

## 令和4年度 余市町文化財関係施設入館(入河)者調査

下段の数字は前年度

施設名	史跡 フゴツペ洞窟		重文 旧下ヨイチ運上家		余市水産博物館		史跡 旧余市福原漁場		総 計	
	月別 入館者数	月別 入河料	月別 入館者数	月別 入河料	月別 入館者数	月別 入館料	月別 入館者数	月別 入河料	入館者数	入館料
4月	613	157,280	169	36,640	270	39,300	173	43,680	1,225	276,900
	402	105,780	103	22,020	182	33,740	101	26,540	788	188,080
5月	1,314	355,300	378	85,520	373	85,600	377	95,820	2,442	622,240
	527	135,480	149	33,940	126	19,300	182	44,340	984	233,060
6月	1,185	336,520	430	86,920	349	58,860	394	108,880	2,358	591,180
	248	67,100	77	21,180	80	11,880	84	16,780	489	116,940
7月	1,728	475,120	518	126,720	479	97,520	482	129,900	3,207	829,260
	1,320	352,580	401	92,900	310	63,460	363	107,000	2,394	615,940
8月	2,062	561,740	466	111,060	476	89,020	455	106,760	3,459	868,580
	1,106	289,760	228	65,440	196	36,320	273	79,000	1,803	470,520
9月	1,522	417,660	557	126,400	406	90,640	507	136,940	2,992	771,640
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10月	1,093	308,820	358	87,200	397	82,000	392	96,440	2,240	573,460
	866	234,640	306	55,700	219	39,380	318	70,120	1,709	399,840
11月	538	150,000	138	31,480	144	26,980	109	30,780	929	239,240
	579	150,260	166	32,620	228	35,840	147	40,720	1,120	259,440
12月	51	16,220	30	5,700	61	7,300	36	9,660	178	38,880
	56	14,800	16	3,600	27	4,680	8	3,840	107	26,920
計	10,106	2,778,660	3,044	697,640	2,955	577,220	2,925	757,860	19,030	4,811,380
	5,104	1,350,400	1,446	327,400	1,368	244,600	1,476	388,340	9,394	2,310,740

## 3. 事業活動内容

## (1) 寄贈資料受付件数

令和4年4月1日～令和5年3月31日までの受入資料は、和文タイプライター、スキー、古写真など計10件であった。

## (2) 展示活動

## ≪登町10遺跡報告展示≫

会 場 余市水産博物館 2階

実施期間 5月3日～12月11日

内 容 令和2年度に町内で発掘調査された登町10遺跡に関する展示を行った。

## ≪土器じいビックアップ展示≫

会 場 余市水産博物館 2階

## ・「安芸遺跡」

実施期間 4月9日～6月5日

内 容 常設展示していない資料を中心に安芸遺跡出土資料を展示した。

## ・「今 善作氏の世界一周」

実施期間 6月9日～7月31日

内 容 「旅」をテーマに、今 善作氏が使用していた旅行カバンや海外のパンフレットなどの資料を展示した。

## ・「北の縄文リレー展 in 余市」

実施期間 8月5日～9月30日

内 容 北東北・北海道縄文遺産群に関する資料やパネルの展示を行った。関連事業としてギャラリートークと講演会を実施した。

主 催 北海道・北海道教育委員会  
共 催 余市町教育委員会

・「あったか〜い展示」

実施期間 10月1日～12月11日

内 容 昭和期に使用された、あんかや湯たんぼなどの資料を展示した。

《小さな展示》

会 場 余市水産博物館 1階

・「蒲（がま）」

実施期間 4月9日～6月30日

内 容 蒲の生態と人の生活との関わりについて展示を行った。

・「ヒルガオ科の植物」

実施期間 7月1日～9月30日

内 容 ヒルガオ科の植物とこれに関わる昆虫について展示を行った。

・「冬芽と葉痕」

実施期間 10月1日～12月11日

内 容 植物の押葉やその果実、冬芽の写真を展示した。



「土器じいピックアップ展示」開催状況



「小さな展示」開催状況

(3) 講演・講座・イベント

《来たことない町民、ゼロ計画》

実施期間 開館期間中（4月～12月）の毎月第2土曜・第2日曜日

会 場 余市水産博物館・旧下ヨイチ運上家・旧余市福原漁場・フゴッベ洞窟

内 容 開館期間中の毎月第2土曜・第2日曜日に余市町民を対象に各施設を無料開放した。

また、町民の来館者には町民アンケートの記載をお願いした。

参加者数（4～12月） 博物館195名、運上家69名、福原漁場58名、フゴッベ洞窟99名

《夏休みイベント「土器じいの5周年記念式典」》

実施期間 7月24日～8月28日

会 場 余市水産博物館

内 容 博物館入館者を対象に、①土器じいをさがせ！～5年間のおもひで～、②土器じいにメッセージを贈ろう！、③土器じい新デザイン案募集！、④#土器じい5周年、のうち参加した事業内容にあわせて景品を配布した。また、景品は課題達成率に応じて内容を変えた。

共 催 余市水産博物館活動協力会

参加者数 35名

《ハロウィン&クリスマスBINGO》

内 容 博物館資料の写真かイラストが描かれたビンゴカードを配布し、館内で資料をさがし、すべてビンゴとなった参加者には景品を配布した。参加者の年齢や資料の知識にあわせて、初級編と挑戦編を用意した。また、同時期に実施している余市町図書館の季節事業と連携して、博物館及び図書館で季節事業に参加した来館者には特別な景品を配布した。

会 場 余市水産博物館

共 催 余市水産博物館活動協力会、余市町図書館

・「ハロウィンBINGO」

実施期間 10月1日～10月30日

参加者数 初級編47名、挑戦編37名

・「クリスマスBINGO」

実施期間 11月1日～12月11日

参加者数 初級編30名、挑戦編33名



「ハロウィンBINGO」ワークシート設置状況



「ハロウィンBINGO」資料探しの目印を設置

(4) 館外活動

講師の派遣依頼等を受け、館所蔵資料を使用し町内外での報告会や出前授業等に参加活動した。

・大川小学校6年生社会科出前授業「北海道の縄文時代を学ぼう」

講 師 中塚風沙

期 日 6月23日

開催場所 余市町立大川小学校

・令和4年度社会教育主事講習「社会教育施設の意義と役割」

講 師 浅野敏昭

期 日 7月13日、11月19日

開催場所 オンライン

・黒川小学校3年生社会科出前授業「リンゴ」

講 師 浅野敏昭

期 日 7月13日

開催場所 余市町立黒川小学校

・旭中学校1年生社会科出前授業「知ろう！見よう！大谷地貝塚」

講 師 高橋美鈴



- 期 日 7月15日  
 開催場所 余市町立旭中学校
- ・北海道紅志高等学校1年生産業社会と人間【地域を知る】出前授業「寺子屋よいち」  
 講 師 中塚風沙  
 期 日 10月11日  
 開催場所 北海道余市紅志高等学校
  - ・公民館文化教室 町内文化財巡り  
 期 日 10月18日  
 開催場所 福原漁場→運上家→フゴッベ洞窟→西崎山環状列石  
 内 容：余市町の文化財にふれあいながらウォーキングを楽しんだ。
  - ・黒川小学校6年生社会科出前授業「アイヌ文化」  
 講 師 高橋美鈴  
 期 日 10月19日  
 開催場所 余市町立黒川小学校
  - ・女性学級「しめ縄作り」  
 講 師 高橋美鈴  
 期 日 11月7日  
 開催場所 公民館
  - ・演劇公演トークセッション『フゴッベ洞窟の翼をもつ人』  
 講 師 中塚風沙  
 期 日 11月11日  
 開催場所 演劇専用小劇場 BLOCH（札幌市）
  - ・ニッカディステラリーサービス株式会社社内研修  
 講 師 浅野敏昭  
 期 日 11月15日  
 開催場所 ホテル水明閣
  - ・黒川小学校3年生社会科出前授業「余市町-古いいたてものマップ-を作ろう」  
 講 師 浅野敏昭、高橋美鈴、中塚風沙  
 期 日 10月16日
  - ・黒川小学校4年生社会科出前授業「猪俣さんと余市町の発展を学ぼう」  
 講 師 中塚風沙  
 期 日 12月9日  
 開催場所 余市町立黒川小学校
  - ・寿大学 歴史探訪講座「アンギン編み体験」  
 講 師 中塚風沙  
 期 日 1月12日  
 開催場所 中央公民館
  - ・余市文化観光推進プロジェクト〈余市のニシン×りんご×ウイスキー深堀！ツアー～余市の歴史文化の魅力再発見～〉「余市の歴史～ニシンとリンゴのニッカから～」  
 講 師 中塚風沙  
 期 日 1月14日  
 開催場所 余市町観光物産センター「エルラブラザ」
  - ・おたる案内人1級講座「小樽の街と鮭漁」  
 講 師 浅野敏昭

- 期 日 1月31日  
 開催場所 小樽市民センター
- ・黒川小学校6年生社会科出前授業「MISSION! 考古博士になれ!」  
 講 師 中塚風沙  
 期 日 2月9日  
 開催場所 余市町立黒川小学校
  - ・大川小学校3年生社会科出前授業「昔の道具いまとむかし」  
 講 師 中塚風沙  
 期 日 2月10日  
 開催場所 余市町立大川小学校
  - ・おたる案内人2級検定対策講座「小樽の街と鯨漁」  
 講 師 浅野敏昭  
 期 日 2月25日  
 開催場所 小樽市民センター

(5) 共催、後援事業

◀「北の縄文回廊 余市町」▶

会 場 北海道庁本館1階ロビー

内 容 北海道環境生活部文化局文化振興課縄文世界遺産推進室と共催で、北海道庁本館1階ロビーにて、展示を行った。

第 一 期 「安芸遺跡出土資料の展示」6月1日～8月1日

第 二 期 「よいち縄文野焼き保存会の製作作品展示」8月1日～9月30日

第 三 期 「大川遺跡出土資料の展示」9月30日～12月7日

第 四 期 「安芸遺跡及び大川遺跡出土資料の展示」12月8日～2月28日

共 催 北海道、余市町教育委員会

◀「北の縄文展 2022in 釧路」、「北の縄文展 2022in 網走」▶

内 容 釧路市及び網走市で開催された「北の縄文展 2022」において、後援として安芸遺跡・大川遺跡出土資料の貸し出しを行った。併せて、釧路会場では高橋学芸員によるフロアトークを実施した。

・「北の縄文展 2022in 釧路」

会 場 釧路市博物館特別展示室

実施期間 9月17日～10月29日 ※フロアトーク9月17日

共 催 北海道、釧路市立博物館、北の縄文道民会議

・「北の縄文展 2022in 網走」

会 場 北海道立北方民族博物館

実施期間 10月30日～12月1日

共 催 北海道、北海道教育委員会、北の縄文道民会議

◀「北の縄文リレー展 in 余市」、「北の縄文リレー展示 in 余市」関連事業▶

内 容 世界遺産である北東北・北海道縄文遺産群に関する展示を行い、ギャラリートークを実施した。関連事業として、北海道・北東北縄文遺跡群と余市町の繋がりについて講演を行った。

共 催 北海道、北海道教育委員会、余市町教育委員会

・「北の縄文リレー展 in 余市」

会 場 余市水産博物館2階 (ピックアップ展示)

実施期間 8月5日～9月30日

・「北の縄文リレー展ギャラリートーク」

実施日時 8月6日

会 場 余市水産博物館2階

参加者数 8名

講 師 北海道環境生活部文化局文化振興課縄文世界遺産推進室 村本周三 氏

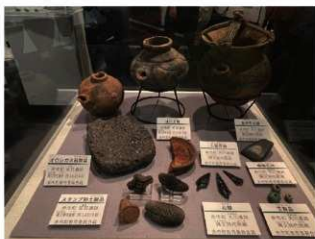
・モイレカレッジ（講演会）「世界遺産と余市町の縄文遺跡」

会 場 余市町図書館2階

実施日時 8月5日

参加者数 20名

講 師 北海道環境生活部文化局文化振興課縄文世界遺産推進室 村本周三 氏  
高橋美鈴



「北の縄文展 2022in 釧路」展示状況



「モイレカレッジ」実施状況

≪令和4年度はじめまして文化財事業「土器じい道場」≫

・「勾玉ってなんだろう？」「勾玉を作ってみるのじゃ！」

実施日時 8月10日

会 場 余市町図書館2階

内 容 北海道立埋蔵文化財センターの立田理氏による勾玉をテーマとした講座及び勾玉づくり体験を行った。

共 催 北海道立埋蔵文化財センター、余市町教育委員会、余市水産博物館活動協力会

参加者数 15名

講 師 (公財)北海道埋蔵文化財センター 立田 理 氏

≪おうちミュージアム「土器じいからの挑戦状」≫

令和2年2月より北海道博物館事業として開始。当館は、同年2月よりその趣旨に賛同し、おうちミュージアム「土器じいからの挑戦状」として、余市町ホームページや博物館内でワークシートなどを公開した。

≪余市町教育委員会社会教育課 SNS 事業≫

社会教育課(余市町中央公民館・余市町図書館・余市水産博物館及び文化財施設)共同の SNS である、Twitter「土器じいのつぶやき」、YouTube チャンネル「土器じいチャンネル～余市町教育委員会社会教育課～」の更新を行った。

(6) 資料の貸出等

令和4年度の資料貸出等の対応件数は58件であった。内訳は貸出9件、デジタルデータ貸出26件、閲覧・撮影等8件、資料調査15件で、総貸出点数は354点であった。詳細は以下のとおりである。

◀資料貸出▶

- ・北海道立埋蔵文化財センター令和4年度企画展示「北海道・北東北の縄文遺跡群展」  
(フゴッペ貝塚遺跡出土 土器4点、剥片石器6点、北海道式石冠1点)
- ・余市町立沢町小学校「3年生社会科 昔の道具」  
(洗濯板1点、洗濯たらい1点、手回し洗濯器1点) など

◀デジタルデータ貸出▶

- ・令和4年度アイヌ工芸品展「アトツイ-海と奏でるアイヌ文化」-カムイギリ画像
- ・プロフェッショナルWatch (動画)「水産試験場のオシゴト」-福原漁場外観画像 など

◀撮影・取材▶

- ・STVラジオ「ごきげんようじ」-フゴッペ洞窟
- ・TBS「世界ふしぎ発見!」-フゴッペ洞窟 など

4. 調査研究活動

・浅野敏昭 (歴史)

研究協力 平成31年度～令和3年度科学研究費助成事業 基盤研究(B)研究課題「北海道・東北と樺太におけるアイヌ・和人間の北方交易圏の実態研究」(領域番号:19H01386)研究代表者 百瀬 響

原稿執筆 公益財団法人似島文化財団2022.5「第1節 猪俣家の足跡」『銀鱗荘 建造物調査報告書』余市町でおこったこんな話(毎月)「後志見聞録」『月刊小樽學』第157～168号

・高橋美鈴 (保存科学・埋蔵文化財・教育普及)

研究協力 令和4年度科学研究費助成事業 基盤研究(C)研究課題「東アジア出土の植物灰ガラスは西アジア産か?-ガラス交易路解明に向けての基礎研究-」(課題番号:20K01116)研究代表者 田村朋美

原稿執筆 池谷和信・編2022.4「第3章 ガラス玉の導入と流通」『アイヌのビーズ 美と祈りの二千年』平凡社  
Misuzu Takahashi, Anna Takemori, Tomomi Tamura 2022.9「Primorsky Krai in Russia and Northern Japan Viewed from the Perspective of the Bead-making technique of Glass Beads」

・中塚風沙 (埋蔵文化財・教育普及)

ニッカウキスキー保存活用計画国庫補助事業  
埋蔵文化財現地踏査、工事立会

## 『余市水産博物館研究報告』投稿要綱

『余市水産博物館研究報告』は、余市町に関する研究成果を掲載し、学術・地域・文化の発展に寄与することを目的に発行いたします。原稿を広く募集しますので、本規定に基づき投稿してください。

- 1) 著作権は博物館活動協力会に帰属する。
- 2) 掲載の採否は余市町教育委員会及び余市町水産博物館活動協力会が決定する。余市町教育委員会及び余市町水産博物館活動協力会は、著者に対して内容や句点の修正などを求めることができる。
- 3) 内容の審査の結果、修正が求められた原稿は3ヶ月以内に提出すること。
- 4) 原稿は、論文題目、著者名、所属先、本文の順で記入する。
- 5) 本文末の参考・引用文献は、原則、(佐藤・高橋:2015)、(田中ら:1998)、(鈴木:1999a)のように表記する(同著者、同年の論文が複数ある場合はa, b, c...で区別する)。
- 6) 本文末の「参考・引用文献」欄では、和文の文献を筆頭著者名の50音順に、続いて外国語の文献を筆頭著者名のアルファベット順に並べる。各文献は、著者名、西暦発表年、論文題目、掲載された学術雑誌名、巻、開始ページ終了ページの順で記す。題目は「」で、単行本の書名は『』で囲む。
- 7) 入稿は、文章ならびに図版をプリントアウトした紙媒体のもの1部と図版を含むレイアウト済みのデジタルデータ(Word データ)をCD-ROMに格納したものを送付すること。
- 8) 和文と英文の要旨をつけることができる。また、図の説明には英文を併記することができる。
- 9) 本誌に掲載する全ての論文等の著作は、ウェブサイトで一般に公開されることがあるため、投稿にあたってはインターネット上での公開に関しても同意を前提とする。
- 10) 提出原稿の返却はいたしません。
- 11) 1ページA4サイズで天25mm、地・のど・小口20mm、2段組、22字(10.45pt字送り)×45行(15.85pt字送り)とする。
- 12) 文字サイズについては、以下のとおりである。  
本文: MS明朝、10pt  
タイトル: MS明朝、中央揃え、14pt  
氏名: MS明朝、中央揃え、11pt  
所属: MS明朝、中央揃え、10pt  
小タイトル: MSゴシック、10pt  
図・表タイトル: MSゴシック、9pt 引用・参考文献: MS明朝8pt  
単位・記号・英数字は半角、一桁は全角

**余市水産博物館研究報告 第 17 号**

令和5(2023)年3月31日 発行

出版 株式会社 石井印刷

編集 余市水産博物館

発行 余市水産博物館活動協力会

〒046-0011 北海道余市郡余市町入舟町 21

TEL&FAX 0135-22-6187